

歴史文化を生かしたまちづくり



森山 學さん

熊本高専建築社会
デザイン工学科教授

熊本高専建築社会デザイン工学科（八代市）の森山学教授（46）は、熊本地震で被災した地域のシンボルの一つ「赤レンガ倉庫」（同市日奈久中町、大正時代）の跡地に今年2月、学生や住民と協力して古いれんがを再利用した広場を完成させた。教室を飛び出し、地域と一緒にしたまちづくり活動を続けている森山教授に、まちの魅力づくりへの思いを聞いた。
(平井智子)

地域に寄り添い 課題解決へ提案

専門は建築の歴史や意匠などで、特に歴史文化を生かしたまちづくりにかかわりたいと活動しています。建物からグッズやチラシまで何かをつくる「ものづくり」だけでなく、暮らしや歴史文化を見直すようなソフト面の取り組み、具体的にはイベントの実施など「ことづくり」もたくさんやってきました。

学生には、設計の授業でもプロジェクトの提案でも、ただデザインのいい建物を考えるのではなく、地域に調査に行って、地元の人とたくさん話をして、地域に寄り添うような形で案を練ってほしいと言っています。建築で解決できない課題はたくさんある。そのとき、どういった「ことづくり」をすれば解決できるか、

それも含めて地域と一緒にになって考えていくことが大切です。

赤レンガ倉庫跡地の広場整備は、熊本地震後の5月、休校が解除されてすぐ取り組み始めました。教室で空想の設計課題をやっているわけではないので、学生は戸惑う場面もあったと思います。地元での会議に出席すると、地域の人たちの間でもいろいろな考え方があります。学生の提案に対しても、予算の見積もりや別の案を求められたり。実際の作業も、解体したれんがを仮置き場で、土砂の中から掘り出すところから始めなければなりません。

こうした授業では体験できないような『試練』を地元の人と一緒に味わって、



「学生には地域に出て、地元の人たちとたくさん話をしてもほしい」と話す森山学教授。糸車や机は古民家が解体される際に譲り受けた。八代市

みんなで目標を共有して成し遂げたのは良かったと思います。仕事の厳しさと達成感を味わいました。学生によるこの広場の計画案は、2016年の全国高専デザインコンペティションで審査員特別賞を受賞。「地域をきちんと調査した上で、案を作っている」と評価されています。

地震の後は八代でも、赤レンガ倉庫のほかにも江戸時代の町家などが取り壊されています。ある町家の解体現場でミカンの意匠のくぎ隠しを見つけました。町家は八代妙見祭で笠鉢「蜜柑」を出す中島町にあり、そのくぎ隠しには、祭りと、祭りを担う町衆、町家が一体となっていました。

こういうものが残っていると祭りの魅力がさらに増します。祭りだけではなく、その背景にある町衆の思いや町家など、全部ひっくるめて残っていくことが大事

ではないでしょうか。

所有者に建物の歴史的価値だけでなく、地域の暮らしの特徴を表している点をきちんと伝えたり、市民に歴史的建物がつくる景観の良さを広めたりする活動を、普段から地道にいかねばと感じました。特に空き家の場合が大変ですが、残すだけでなくどうやって活用していくかもひっくるめて、提案していくことが必要です。

◇もりやま・まなぶ 1972年、石川県七尾市出身。東京大大学院工学系研究科博士課程修了。99年から八代工業高専（現熊本高専八代キャンパス）。専門は建築の歴史・意匠、建築設計。1級建築士。八代市在住。